

「日本と原発」河合弘之監督の最新作

日本と再生

光と風のギガワット作戦



監督 河合弘之
(弁護士)

企画・監修 飯田哲也
(環境学者)

音楽 新垣 隆

エンディング
テーマ 坂本龍一

世界を駆動させるのは、
あふれる自然の力！

地球をひと回りして自然エネルギーの活況を見に行こう。
メインストリームはすでに原発でも化石燃料でもない現実を！

太陽、風、地熱、バイオマス etc. よくよく見れば、日本は資源大国！
地域も経済も再生させる作戦を開始しよう——。

太陽がいっぱい。風がいっぱい。
世界はもう、自然エネルギーで動いている！

3月21日 春分の日 水

場 所 くにびきメッセ 小ホール

時 間 13:30 ~ 17:00

参加料 500円 高校生以下無料
介助者1名無料

<第一部>

13:00 開場

13:30 上映

<第二部>

15:20 講演「自然エネルギーの現状と展望」

16:00 講演「八雲立つ日本・出雲から未来を拓く」

<第三部>

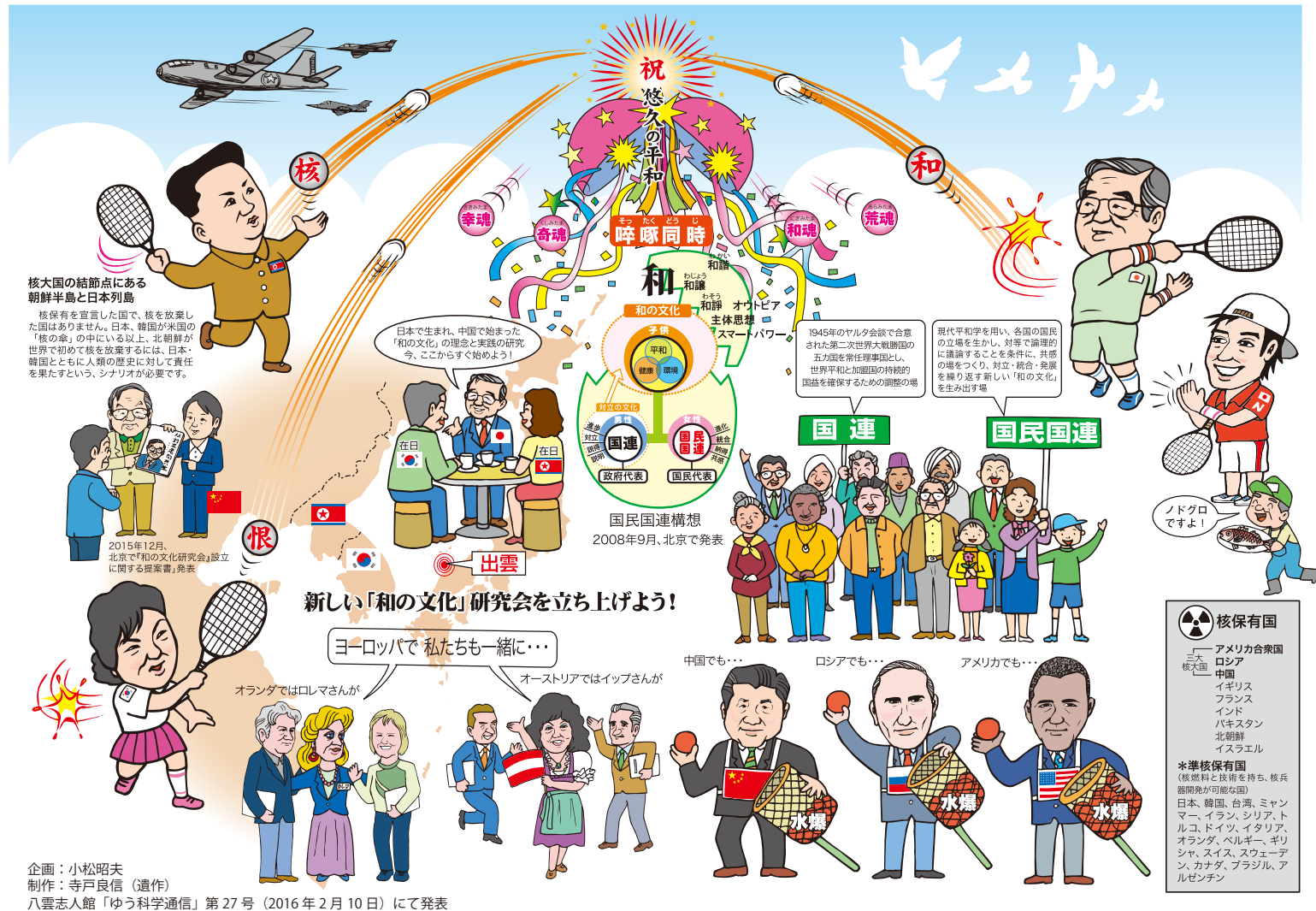
ベルタ・フォン・ズットナー像出発式



人間自然科学研究所

発注：カーネギー財団
制作：イングリッド・ロレマ

2017年 / 日本・ドイツ・フランス / カラー / ステレオ / ビスタ映写 / Kプロジェクト / GKプロジェクト



企画：小松昭夫
制作：寺戸良信（遺作）
八雲志人館「ゆう科学通信」第27号（2016年2月10日）にて発表

核保有国
「三大核大国」
アメリカ合衆国
ロシア
中国
イギリス
フランス
インド
パキスタン
北朝鮮
イスラエル

※準核保有国
（核燃料と技術を持ち、核兵器開発が可能な国）
日本、韓国、台湾、ミャンマー、イラン、シリア、トルコ、ドイツ、イタリア、オランダ、ベルギー、ギリシャ、スイス、スウェーデン、カナダ、ブラジル、アルゼンチン

第二部

講演者プロフィール



いそえ きみひろ
磯江 公博

株式会社エナテクス常務取締役境港支社長

1952 年鳥取県羽谷町（現湯梨浜町）生まれ。青年海外協力隊入隊（モロッコ）、羽谷町町会議員、羽谷町助役を経て、現在、株式会社エナテクスで太陽光発電事業（追尾型太陽光発電の全国展開）に取り組む。



こまつ あきお
小松 昭夫

小松電機産業株式会社代表取締役
一般財団法人人間自然科学研究所理事長

1944 年島根県八雲村（現松江市八雲町）生まれ。佐藤造機勤務を経て 1973 年創業。空間価値を生み出す「happy gate 門番」、IoT・クラウドの先駆け、水の総合管理システム「やくも水神」、「対立から共生の文化へ」の転換が生まれる平和事業（人間自然科学研究所）の3事業に取り組む。

第三部

ベルタ・フォン・ズットナー像出発

出雲から朝鮮半島へ！
女性初のノーベル平和賞受賞者・第一次世界大戦前のベストセラー小説『武器を捨てよ』の作者ズットナーの胸像（日蘭共同制作）が、「平和の特別使節」として、韓国・板門店めざして羽ばたく。



創作キルト作家 内藤和美「ゲルニカに会いたくて」

参加申し込み メール（staff@komatsuelec.co.jp）もしくは FAX（050-3161-3846）まで返信願います。

氏名	住所または団体名	電話番号	メールアドレス

問い合わせ先：人間自然科学研究所 八雲志人館 交易場（こうえきば） 080-3008-6808
主催 一般財団法人人間自然科学研究所 / 協賛 島根原発・エネルギー問題県民連絡会

春 秋

昭和20年（1945年）8月。終戦を前にした霞が関の官庁街で、建物の庭先から煙が上がった。資料や文書を焼却せよとの指示が政府から出たためだ。作業は何日も続き、あの戦争の中で誰がどんな指示を出し、物事がどう決まったのか、相当の事実が闇へと消えた。

▼これは日本にとって重大な失敗だったと、作家の保阪正康さんは共著書「戦争と天災のあいだ」などで指摘する。ほかの国から戦争中の行いを非難されたとき、「そんな記録はない」と反論しても「焼き捨てたんだろ」と言われてしまう。政治・軍事の当事者たちには歴史に対する責任感が欠けていたと保阪さんは語る。

▼森友学園への国有地売却を巡る文書の件で、鍵となる人物の一人が国会に証人として立つようだ。数百万の命が失われた戦争と比べれば、発端となったことの大小にだいぶ差がある。しかし副産物として、いま日本で政治に携わる人々の「記録」に関する認識に、やや危なっかしい面があることを期せずしてあぶり出した。

▼50年後、100年後の人々から判断を仰ぐための起点は正しい記録だ。しかし文書などがない場合、歴史研究では記憶による語りで補う。将来恨まれるにしろ感謝されるにしろ、正確な記録と正直な証言が土台になる。昭和20年に比べ日本の政治は変わったか。証言者は事実を隠さず語り、歴史への責任を果たしてほしい。

日本経済新聞 2018年3月16日掲載

目次

THE FUNAI 船井幸雄と「本物人」たち 「文鎮型社会」における競争と共生 ピラミッド型組織から目的共有の自立分散型組織へ	2	小松昭夫
読売新聞 地球を読む 山内 昌之 明治大学特任教授 家康が築いた TOKYO（2018/3/4 掲載）	16	
「将軍の世紀」現代に教訓（2018/3/4 掲載）	17	
朝日新聞 おぞましい戦争体験（2018/1/9 掲載）	18	
救済なき民間の戦災者 瑞慶山 茂 弁護士（2018/1/9 掲載）	19	
日本海新聞 潮流 エナテクス 磯江 公博 常務取締役境港支社長 脱原発エネルギー時代（2018/2/23 掲載）	20	
八雲立つ日本・出雲から「共生文化」の創造を	21	
事業経営の目的を人間の本来あるべき姿（真の健康）の追求と定め、社会問題を「哲学」	22	
「技術」「経営」の3方向から考察、時代の変化を追い風にマーケットを創造		
2017年8月11日 ホーマー・ハルバート博士 68 周忌追悼式 挨拶 日韓対訳	24	
人間自然科学研究所 構想ストーリー	26	
大林宣彦監督 次回映画制作に向けた手紙	36	

New Paradigm Books
THE FUNAI 14



「船井幸雄と 本物人」

共生社会と
企業経営 たち

Part 2

船井幸雄
[編]

ビジネス社

■船井幸雄と「本物人」たち PART II

「文鎮型社会」における競争と共生

プレミアム型組織から目的共有の自立分散型組織へ

小松 昭夫

(小松電機産業(株)社長)

人間の集まりには三つの形態が考えられます。それは群集、集団、組織であります。群集というのは、人が大勢集まった状態です。例えば花火大会がある。花火を見ようと人が集まってくる。

群集の特徴は意識の点でバラバラなことです。みんなが同じ目的意識かというところではない。大多数は花火を見ようとして来るけれども、中には人が集まっているから来た、という人間もいる。つまりきっかけは花火大会だが、集まる人間の目的意識は必ずしも一様でない、従ってまとまりもない。

これが集団になると、もう少しはつきりした意識

の共有が見られるようになります。たとえば自分は菊づくりが好きである。あるいはサーフィンが好きである。それで同好の士が集まって菊の展示会を開いたり、サーフィン大会を催す。こうやって集団が形成されます。

ただ人間の好みというのは、非常にうつろいやすいもので、この種の集団は離合集散を常に繰り返すことになります。もし、その集団を維持したければ、一定の仕組みが必要になってきます。例えば花の世帯であれば、家元制度であるとか、免許であるとか、いろんな仕組みをリンクさせることによって集団と

しての存在を維持できるようになります。

そして、組織は明確な目的意識に支えられ、目的を具現化するための目標を設定することによって、その構成員は各々が具体的目標達成のための役割を担うことになります。我々が所属する最も大きな組織は国家ですが、従来、この国家のモデルを小さくしたのが「企業」ということができると思います。

組織にはいくつかの形態が見られます。その一つがピラミッド型と呼ばれるもので、日本の場合、国家も企業も大半がこの形態によって構成され、そのもつとも典型的な例を挙げれば軍隊組織がそれであります。この組織形態の最大の特徴は上位下達にあります。

最上位に意志決定権を持つ一群の人間がいる。ここで思考し判断し決定したことが、すぐ下の組織に伝えられる。その組織の人間は、上からの指示、命令を忠実に受けとめ、それが運用されるように管理し、さらに自分の下位組織に伝える。下位組織は言

われたことをそのまま一生懸命に実行するわけであります。

つまり意志決定する最上位組織、それを管理運用する中間組織、ただひたすら実行する下部組織の三層構造で成り立つのが大ざっぱに見たピラミッド型組織の特徴であります。軍隊組織がこの典型ですが、現在の国家も企業も基本的にはこの構造に拠っているといって差し支えないと思います。

露呈するピラミッド組織の矛盾

組織というものは、その性質上、維持されなければなりませんから、そのために中間層、下部組織への教育が行なわれます。これら組織の人間にはどういう能力が必要であるか。それはただただ指示されたことを運用管理し、実行する能力であります。従って、そのような能力と資質をどうやって作り上げていくかが、この組織による集団が行なう教育の最大眼目になります。

軍隊に限らず国家の教育システム、あるいは企業

■船井幸雄と「本物人」たち PART II

内教育システムも、ピラミッド型組織にあつては、すべてこのような原理に基づいております。ではない。誰のためにその組織は維持されるのか。ここが大きな問題なのですが、これははっきりいって最上位にある人間のためといつてよいかと思ひます。

最上位の人間は自分たちの組織を維持することを優先的に考へる。そのためには中間層や下部組織の人間が自分たちの指示命令にしたがつて嬉々として行動し、嫌にならないように生活の保障を与えなければならぬ。しかし与えすぎると、今度は働かなくなるから、常に富の配分でブレーキをかける。この辺のやり方は非常に巧妙であります。

例えばこういうことがあります。神戸港に石炭運搬船が着く。沖仲仕はそれをモッコで運ぶことで日当を貰ひ生計を立てております。彼らに支払う日当は世間相場から見ても低いものではありません。いわゆる3K職場ですから、それだけ払わないと働き手がない。

だが最上位の人間から見れば、彼らに生活面であ

まり余裕を持つてもらいたくない。余裕ができれば働き手が怠ける。働き手が不足する。そういうことにならないように、彼らの賭博好きを利用してお金を貸す。貸すことで借金返済のために一生懸命にまた働かせる訳です。

こういう仕組みで港湾労働は成り立っているが、これと同じような事は社会のいたるところに見られるのであります。常にお金が少し足りない状態をキープすることで、社会の最下部組織の人間をうまく活用する。これがピラミッド型組織の社会システムの真の姿であります。

この仕組みの中で中間層の立場はどうかといへば、一つは下部組織よりも上であるという意識を植えつけることがあります。そうすることによって自尊心を満足させる。もう一つは生活の保障を与えること。自尊心を与える分だけ賃金は少ないが、そのことに彼らはあまり気づきません。従つて彼らは下部組織を自分でコントロールしているように思っているが、実際は最上位の意志を下部組織に実践させている口

ボット集団に過ぎません。

この重層構造は企業社会においてもみられます。一つは大企業の中における組織のあり方そのものが、このような三層構造によってできあがっている。一握りの経営幹部と中間管理職、平社員クラスの関係に、いま言ったことはそっくり当てはまります。

さらにいえば大企業と中小企業の関係にも同じ構造が見られるのであります。中小企業の状況によって中間層であったり最下部組織であったりします。中小企業は大体創業者が一代にして築き上げます。だがよほど優れた経営者に統率された企業か運のよい企業でないと長続きはしない。作っては倒れ、作っては倒れるのが中小企業の特徴であります。

創業者の時代に倒れなくても相続税で大体立ち行かなくなります。閉鎖型のピラミッド社会では人材もなかなか良い人が採れない。あるいは不況への上位者からの保護も十分ではない。その昔、徳川政権は農民を扱うについて「生かさず殺さず」という方針をもって臨みましたが、現代の中小企業はさしず

め「生かしてから殺す」という方法が採られております。

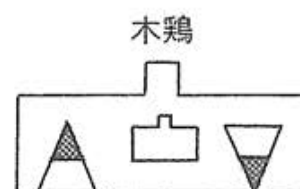
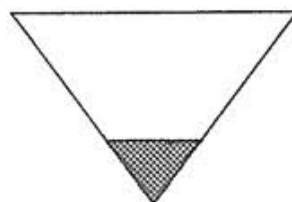
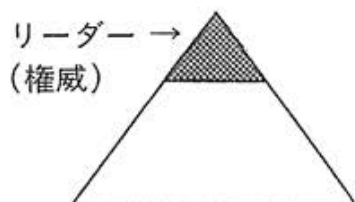
何もないところから懸命に立ち上がって一定の成功を収める。そこまでは自由にやらせるが、あとはほっておいて倒れるに任せる。創業者のとき、中小企業は大体うまく行きますが、二代目、三代目で内部矛盾が構造矛盾によっておかしくなる。それを大企業がどんどん吸収していく。そういう仕組みのほうかピラミッド型組織は運営がしやすいのです。

ベンチャー企業の育成ということが盛んにいわれながら、日本でなかなか育たなかったのは、現在の社会制度がピラミッド型を前提に作られてきたことと大いに関係があると思われます。しかし、こうしたピラミッド型の組織というものは、衣食住が不足する社会、あるいは外敵から襲われる恐れの大きい社会、こういう状況下では非常にうまく機能しますが、安定した豊かな社会においては非常に矛盾が露呈してきます。

幸か不幸か、人類史を見ると、衣食住が満たされ

■船井幸雄と「本物人」たち PART II

- (1) ピラミット型社会 (上意下達社会) (2) 逆ピラミット型社会 (下意上達社会) (3) 自立分散型社会 (リーダーの養成社会)

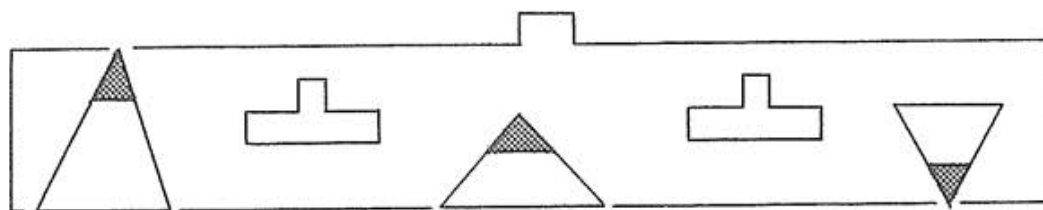


リーダーシップ
(人望)

1. 成果 2. プロセス 3. 人材

1. 人物 2. プロセス
3. 成果

- (4) 混在型社会 (文鐘型社会)



た時代というのは極めて少ない。それゆえピラミッド型の社会構造が圧倒的に多かったわけですが、現代の日本や先進諸国にあつては、衣食住と安全にクリアされた。したがってピラミッド型組織は、あちこちでその矛盾を露呈し、きしみ始めている。近年の乱世ともいえる価値観の逆転、既成神話の崩壊現象はそのことを端的に示していると考えられるのであります。

自分も他人も良くなる社会構造

社会心理学者マズローの欲求階層説に従えば、人間は生理的欲求、安全欲求、集団欲求、尊厳欲求、自己実現欲求の五段階を、あたかも階段を昇るよう、一段一段クリアしていくそうではありますが、現代の日本社会の状態は第四段階から第五段階への移行期にさしかかっていると考えられます。

生理的欲求の飢餓は飽食に変わり、安全欲求は平和な法治国家が保証している。集団欲求は会社に帰属し、あるいは自由に仕事を選べることで満たされ

ている。いま人々に残されているのは、自分の生存の意味づけ、生き甲斐追求といった側面だけであります。

早い話「食って生きていく」だけなら誰も困らないのです。まして現代の人口の大きな部分を占めている団塊の世代以下の人間たちは、それ以前の世代が経験した飢餓や戦争体験とも無縁である。マズロー理論で言えば、生まれた途端に生理的欲求、安全欲求、集団欲求をパスして自尊欲求に直面してしまっているのです。

自尊欲求とは「自分の存在感の確認」であります。自己実現の欲求とは「真の生き甲斐に満たされた自分固有の生き方」をすることです。「自分は何のために生きているのか知りたい」「本気で命を賭けられるような生き方をしたい」。こういうことをまじめに思っても、それを救い上げてくれるところがない。オウム事件というのは、こういった若者の意欲、衝動を現代の社会構造が汲み取れなかったため起きたことではないかと思うのであります。

要するに「働かなければ食えないぞ」「安全な社会を維持するためには義務を果たせ」といったことを基本的に強いるピラミッド型の社会構造では立ち行かなくなってきた。

ではどのような社会構造が求められているのかという問題がここから出てまいります。

これはあくまで私見ですが、私は文鎮型社会ではないかと思うのであります。ピラミッド型は上位下達であったが、文鎮型は極々小さな、必要最小限の上部構造の下に、各個人が自尊欲求、自己実現欲求を満足させながら生きていけるような社会構造のこととであります。

それはまた言葉を変えれば自立分散型組織といってもよい。一人一人が命令されることなく、指示されるのでもなく、お互いが並列的な連携を保ちながら、役割分担をして各自の目標へと向かって進んでいく。

ピラミッド型組織では、どうしても最上位の人間が優先されてしまうが、文鎮型にあつては「自分も

■船井幸雄と「本物人」たち PART II

良くなるが他人も良くなる」ということが一人一人の基本的なスタンスになってくるのであります。

ピラミッド型社会において人々の行動の原動力は競争にありました。競争に勝ったものが地位や名誉、富によって最上位の仲間入りができる。つまり競争原理に基づく権力構造であります。これが文鎮型社会構造ではどうなるかといいますと、もちろん競争がなくなるわけではありません。ただ競争の持つ性質は大きく変わってまいります。

文鎮型組織の社会にあつての競争は、自分に与えられた役割で遅れたときに、一種の競争意識をもってその遅れを取り戻そうとすることであります。例えば家を建てているとき、左官屋の作業が進んだのに、電気工事が遅れている。「俺も急がないと、左官屋さんを待たせることになる」。こういう形で競い合うことになる。いわば役割分担の形を変えた姿が文鎮型社会における競争ということになります。

つまり、お互いが助け合つて共通の目標、あるいは個々の目標実現のために行動をする。そこには競

争もあるが一方で共生ということが大きくクローズアップされてくることになります。

これまでの社会では相手に勝つことが善であり正義であつた。その勝ち方は多分に利己主義的なものであつたといえます。

まず自分が勝利するためには相手を叩きのめすこともやむを得ない。そこには弱肉強食の原理でやってきた結果、何を招いたかといえば、それは未曾有の自然破壊、環境破壊であつたわけです。

その破壊の度合いは生やさしいものではなく、人類は自ら自分の首を絞めようとしている。これを是正するには既成の価値観、既成の組織を根本から変えなければいけない。事態はそれほど深刻なところまで来ている。いま世の中の既成の価値観が音を立って崩れていつているのは、好むと好まざるとに関わらず、人類がこれまでの生き方を変えなければならぬことを無意識に察知しているからにほかなりません。

文明の発展過程は自然破壊の過程

以上のような現状認識の上で、以下に私たち企業の役割ということを考えてみます。企業の「企」という字は「人を止める」と書く。人が止まるのが、すなわち顧客であります。企業は広い意味で顧客、すなわち消費者というもののなしには存在できません。ところが人はどうかというと、人は本来立ち止まるのを嫌うものです。ほっとおけばすぐにどこかへ行ってしまふ。そういう人間をどう止めるか。それには立ち止まるほどの価値ある何かを創り出さなければならぬ。それを創り出すのが企業活動である。これが企業が考えなければならぬ第一点であります。

次に何かを企てますと、ある状況が必ず生まれてきます。うまく行けば行ったである状況が、まずく行けばまずく行ったことで引き起こされる状況がある。そのためにまた新しい企てが必要になってまいります。

人間の欲望に歯止めがないように、企業活動もあとからあとから企て、企てでやってきました。そのこと自体は非難されることではないが、そこに利己主義と競争原理が加わったために、だんだんゆがみが出てくるようになってしまった。このゆがみを是正する必要がある。これが第二点であります。

そこで私も小松電機産業では、今まで人間がいろんな欲望を追求する中で、結果的には破壊してしまった自然環境を是正することを大きなテーマにしていこうと考えました。そうして現在見られる数多くの自然破壊の中から我々が選んだのは「水」というテーマであります。

なぜ水か。我々の自然との関わりは土から始まり、次いで木に移り、木の文化から金属へ、金属から火へ、火から水へと進行していったと中国の文明史書には記されているそうです。

驚くべきことは、この文明の発展過程はそのままそっくり自然破壊の過程であったという事実であります。

■船井幸雄と「本物人」たち PART II

農耕文化の誕生はいわば土という自然の人類最初の破壊行為でもあり、次いで森林伐採、焼き畑という木の破壊があり、鉱物資源の乱獲による枯渇、さらに石油資源という火の資源の枯渇にいま我々は直面している。そしてこれらの自然破壊の集大成として水の問題が顕在化してきているのであります。

幸いなことに私も小松電機産業は、日本最大の汽水湖（海水と淡水が入り混じった湖）である六道湖をのぞむ島根県八東郡八雲村にあります。この湖も昨今の水質汚濁の例外ではなく、近年急速に汚染が進み、名物のシジミやスズキの漁獲量が減ってきております。この湖の浄化を進め、松江を中心とするこの地域を「水の都」として再生しようというのが、我々が目下取り組んでいるメイシンの事業構想なのであります。

一九七三年創業の我が社は高速シートシャッター（商品名「門番」）によって広く世間に認知された会社でありまして、この分野では現在でもシェア六〇％をキープしてトップメーカーの位置にありますが、

創業当初より水とは縁が深く、その技術的蓄積の集大成として本邦初の集落排水自動制御監視システム「やくも水神」を開発した実績を持っております。

「やくも水神」は広範囲に点在する浄水処理施設やポンプ場などを通信回線ネットワークで結び、役所など管理機関に設置したホストコンピュータから監視するもので、各施設では流量・残留塩素、濁度などのデータを計測し、複数の上下水処理施設と各中継ポンプ場を管理側で一括監視できる仕様になっております。

以下に簡単にその特徴をあげてみます。

- ①一カ所の役場で最大十五カ所の処理施設と五十カ所の中継ポンプ場の監視が可能となる。
- ②NTTの公衆回線を使うため専用回線に比べて簡単でより広域なネットワークの構築が可能となる。
- ③通信手段が電話回線であることによって、通信経費が通常の約半分ですむ。
- ④各処理施設の運転・計測情報を役場の監視装置

で一括監視できる。

この「やくも水神」の第一モデルは一九九二年に発売、現在までに地元島根県はじめ鳥取、滋賀、兵庫などの自治体に導入され、合計五二システムが稼動しております。さらに一九九四年には排水中の窒素の九五%以上を除去し、りんも効率的に除去する処理施設を自動制御システムとセットにした『ニューやくも水神』を開発しました。目下りんについて化学薬品を使用せずに除去率を大幅に向上させる処理技術の研究開発を進めています。

農業集落排水処理では、排水中の窒素をコンスタントに九〇%以上除去することなどできないというのが大方の関係者の見方でしたが、島根県佐田町に導入された一五〇〇人規模の『ニューやくも水神』では処理水中の窒素濃度の平均値が約一mg/lという実績であり、そのまま稲作に使用可能な水質を確保しております。

今後も研究開発を進めるとともにデータの蓄積に努め、閉鎖水域の中海、宍道湖を抱える松江を水処

理技術のメッカとし、ここから全国の水汚染地域、ひいては世界の水質汚染で悩む地域へと情報発信をしていきたいと思っております。

水処理プラントを国内、世界各地に普及していくためには当面いくつかの隘路がございます。一つは役所の管轄問題です。国内では現在この分野の所管が農林水産省、建設省、厚生省にまたがっていること、また既得権益にしがみついた関係業者の保守性による新技術普及の難しさなどですが、宍道湖周辺に一〇カ所ほど我々の水処理システムを導入し、集積したデータを広く公表することによって、ますます深刻の度を深めている世界の水に関する環境問題解決に寄与したいと願っております。

汚泥処理の難問を解決する「岸理論」

また技術面から申しますと、私どもが「ニューやくも水神」で採用した回分式活性汚泥法による水処理方式は世界に先がけて画期的なシステムとなるはずであります。

■船井幸雄と「本物人」たち PART II

ここでやや専門にわたりますが、水処理技術の現状について触れさせていただきますと、水処理場に流れてくる汚水の処理法には連続式と回分式があり、現在の主流は連続式です。

水処理は、汚水に含まれる微生物が固まって出来た「活性汚泥」が、汚れ成分を分解したり抱き込んで沈殿する性質を利用しています。

回分式は一定量の汚水を溜めて、六時間から八時間かけて活性汚泥の働きで有機物の分解や窒素、リンの除去を行なう方法ですが、回分式では、汚水の水質や活性汚泥の働き具合に合わせ、水のかき混ぜや空気の吹き込みの条件を厳密にコントロールできるので極めて高機能の水処理が出来ます。

これに比べ、一般に窒素・リンの除去率が低いにもかかわらず、従来型の連続式が主流を占めているのは、回分式が理論的によいことは認められながらも制御のノウハウが確立されていなかった。

しかし、それよりも連続式が主流を占める要素で大きいのは、回分式は装置費が安く上がるため、装

置メーカーとそれに連なる人々に大きい利益をもたらさないことが決定的であるように思われます。

つまり、扱いが面倒で儲からない回分式よりも、浄化力では劣るが、扱いが簡単で、利益率も高い連続式のほうがよい——という発想が優先してきたのです。

回分式のネックは扱いにあります。もし扱いが簡便になるのなら、費用的に安く効力的にも優れた回分式が主流を占める可能性が大きい。幸いなことに小松電機産業は、水研究の第一人者である岸博先生と提携することができ、以上のような難問を「岸理論」によって解決したのです。

そこで、かいつまんで「岸理論」を説明しておきますと、岸先生は、活性汚泥が生物として必死に生きようとするときの性質を活用して、窒素とリンとの除去率を高めたのです。活性汚泥が含んでいる窒素と水素の化合物であるアンモニアが、ある化学変化によって窒素と酸素の化合物に変わる。その変化時に外部からの酸素供給をストップしてやると、活

性汚泥はその化合物の酸素を吸ってでも生きようと
する。そして取り残された窒素は大気中に放出され
る——というわけです。

こうした活動を促進するためには、活性汚泥をよ
くかきまぜる必要があります。また汚泥に供給する酸素
をコントロールするため、汚泥内の酸素の状態を調
べる高性能センサーを必要とします。今まではこの
センサーが技術的に不十分だったため、岸理論の実
用化が難しかったのですが、当社の自動制御技術と
ドッキングすることで、ようやくそれが可能になっ
たのです。

以上が「ニューやくも水神」誕生のいきさつです
が、同システムの稼働によってこれまでに当社が得
たデータによれば汚水中の窒素は〇・九一PPM
(別処理場データ一九・五PPM)と驚異的な低さで
あり、これによって今までは再利用できなかった排
水も再利用可能なラインまで到達したわけです。

主体性をもった人間を育てる

江戸時代の農村指導者・二宮尊徳翁は「理念なき
経済は罪悪である。経済の伴わない理念は戯言であ
る」であると申しました。先に申し上げたピラミッ
ド型組織にも理念がないとは申しません。しかし昨
今の社会上部構造の腐敗と利己主義、無責任体制は
欲望の存在である人間の基本に照らして、やはり豊
かな時代の組織論としては適合性に欠けるといわざ
るを得ません。

幸いにしてコンピュータの世界が、ハード、ソフ
ト両面で飛躍的な発展を遂げ、未曾有のネットワー
ク社会が到来しようとしております。この変化は大
資本、大組織しかできなかったような事柄が、私ど
ものような小企業でも可能になることを意味してお
ります。

例えば大型の発電プラントを作るとして、一週間
以内にしっかりと見積りの出せる会社はかつては
超大手企業しかありませんでした。例えば三菱重工
のような会社です。

こういう会社は言うまでもなくピラミッド型組織

■船井幸雄と「本物人」たち PART II

で動いております。またそういう組織でないときになかったのです。

だが現在はどうかといいますと、従業員二百名程度の会社が、システムと情報管理次第で、その程度のことは立派にやってのけられる。そういう時代であります。私どもが矢道湖において水浄化に成功すれば、その情報はほとんどリアルタイムで世界に提供することができ、日本の田舎にある企業でも何の不都合もない。文鎮型社会では場所は問題にならないのです。

資金力も権力も問題にならない。必要なのは情報とそれに取り組む人間の思想という時代になってきている。こうなってきましたと、いまいけば必要なのは、いかにして志を持った人間を育てるかでしょう。

そこで当社では社外機関として人間 (HUMAN)、自然 (NATURE)、科学 (SCIENCE) をテーマに「HNS研究所」を設立いたしました。この研究所では水と関わりの深い地元出雲の先人・周藤弥兵衛の

偉業を伝える出版事業を手始めに、奨学金制度の創設、一村一志運動、ベンチャー起業家支援、研究開発などを行なう計画で、すでにその一步を踏み出しております。

現在は目先不透明な時代であり、いつ何がおきてもおかしくない。乱世といわれるゆえんです。その場合、何がいちばん大切かといえば、時代変化、環境の変化に合わせながら、同時に現状を、あるべき理想の方向へと変えていこうという主体性を持った人材の育成であると思います。

出雲は風土記の故郷でした。風土記の時代は人々がそれぞれ役割を分担しながら、仲良く平和に暮らしていました。このような地域から、人々の命の糧である水浄化の新しい技術を世界に向けて発信するとともに、夢とロマンと使命感を持った次代を担う人間を輩出することが私の願いですが、それはまた「文鎮利社会」の企業に課せられた使命であると思っています。

地球を 読む

今上天皇は2019年(平成31年)4月30日に退位される。新天皇の即位は5月1日となった。生前譲位は江戸末期の光格天皇以来約200年ぶりである。20年の東京五輪は新天皇のもとで迎えることになる。平和の祭典は、日本の新たな象徴の姿を首都東京から世界に向けて発信する、こよなき機会ともなろう。

ところで2020年は、



山内 昌之

明治大学特任教授

江戸入府430年

家康が築いたTOKYO

つたのだ。

家康の江戸城は明治維新後、そのまま皇居となり、4世紀を経ても首都の「緑地」として心のやすらぎを国民に与えている。家康は、江戸を中心に幕藩複合国家ともいうべき「一つの国家」

となろう。

270年間も戦争のない安定した国家と統治機構を創り上げ、「パクス・トクガワナ(徳川の平和)」によって、応仁の乱をはじめ江戸を中心とする戦乱と無秩序を招いた中世の力オスに終止符を

は、家康のリーダーシップ

なしには出現しなかったのではないか。リーダーには運の強さも欠かせない。家康は、豊臣秀吉の文禄・慶長の役で朝鮮に出兵せず、武将として不義の戦いで血塗られずに

た琉球国王の尚寧が1610年に駿府城の家康を訪れた際、家康は広間上段で「御対座」し、一国の主として丁重に礼遇した。これは家康が東アジアの政治力学を正確に理解し、琉球を朝鮮と同じく明との接点と見なす戦略的発想から来たのだらう。尚王家を皇族とせず侯爵に貶した明治政府とは異なる総合力の証左である。

また、薩摩藩に捕らわれた琉球国王の尚寧が1610年に駿府城の家康を訪れた際、家康は広間上段で「御対座」し、一国の主として丁重に礼遇した。これは家康が東アジアの政治力学を正確に理解し、琉球を朝鮮と同じく明との接点と見なす戦略的発想から来たのだらう。尚王家を皇族とせず侯爵に貶した明治政府とは異なる総合力の証左である。

へ2面に続く

東京の前身、江戸に徳川家康が入った1590年から430年に当たる。戸数も少なかった江戸は、幕府の経営によって、1世紀ほどで100万の人口を擁する大都会に成長した。

ほぼ同時代のロンドンの人口は46万人、19世紀初めのパリでも55万人にすぎない。行政の中枢にして巨

大な消費都市江戸は、埋め立てや上下水道の整備を含めた家康の都市計画と土木工事によって、後にメトロ

ポリス東京となる基盤を造上で現代人にも大きな参考

打ち、民間社会の成熟と列島の均質化を進めたのも家康に他ならない。また、江戸周辺農民の年貢を低く抑え、家内制手工業を農村から醸成させ、近代の産業革命への対応を静かに準備した日本の近世

地球を
読む

1面の続き

山内昌之氏 1947年、札幌生まれ。東大名誉教授。政府の「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」メンバー。月刊誌「文芸春秋」に「將軍の世紀」を連載中。

明治新政府が首都を江戸改め東京にしたのは理由がある。江戸が治安の良さと公衆衛生の清潔さで他を圧していたこともある。

だが何よりも、大名屋敷の官公庁転用で無駄を省き、新たな行政司法機構や企業本社を創出して、参勤交代も含めた膨大な武家人口の需要で潤ってきた江戸の商人・職人と家族らに大量の失業者や廃業者を出さない、という百年の計を立てたからだ。明治維新150年に当たる2018年の陰に隠れがちな家康の業績を忘れてはならない。

「狸親仁が白髪首」と文楽「八陣守護城」で擲擧される家康のイメージ

「將軍の世紀」現代に教訓

は、世界史的水準の政治家の本質を歪めてきた。むしろ家康の器量を古代ギリシヤの詩人アルキロコスと比較で表すとすれば、たゞさ

理想を現実に変える家康

この鋭さと独創性を隠し、キツネのように慎重に暗躍する術を身に付けた。しかし、いくら隠していても「臺中の錐」は必ず袋を破って表に出るものであり、約420年前の関ヶ原合戦はまさに、錐が天下を衝いた瞬間だった。征夷大將軍宣下はその自然な結果にすぎない。

注意した。為政者として、物の名や風俗習慣は土地で違ふ有様を理解せよと、さりげなくたしなめたのだ。世界の軍人政治家と比較すれば、カエサルのように『ガリア戦記』を書くほどの文筆家ではないが、ナポレオンばりに核心を突く警句を即妙に発する才には恵まれていた。

また家康は、「水も余りにきれいな魚は住まない」という言葉もよく引き

忍耐力と決断力は、「われ一人腹を切て、万民を助けくべし」という覚悟に象徴される。小牧・長久手合戦後、秀吉に迫られた上洛を暗殺の陰謀だと案じる家臣に、それで戦が回避され多数の人命が助かるのなら、自己犠牲も厭わないと言いつつ、この遠慮の境地は、洋の東西を問わず、過去も現在も最高指導者に

必要な資質であろう。また家康は、和歌や能に耽らずとも政治家として必要な教養は身に付けていた。大坂の陣の際、近くの村に片葉の芦があると聞いて芦を刈らせると、外孫の一人が此処の芦は萩だと余計な注釈を加える。すると家康は「難波の芦は伊勢の浜萩」（世阿弥『芦刈』）という言葉を知らないのかと

家康はリーダーとして「足ることを知って足る者は常に足る」という老子の言葉を身に付けていたのではないか。「天下の政は重箱を搗粉木にて洗ひ候がよろしき」とも家康は述べた。すりこぎでは四角の重箱の隅まで洗えないように、国政も些末なことに干渉せず大目に見るくらいがよいというのだ（『世阿弥行状記』）。

また家康は、「水も余りにきれいな魚は住まない」という言葉もよく引き

「足ることを知って足る者は常に足る」という老子の言葉を身に付けていたのではないか。「天下の政は重箱を搗粉木にて洗ひ候がよろしき」とも家康は述べた。すりこぎでは四角の重箱の隅まで洗えないように、国政も些末なことに干渉せず大目に見るくらいがよいというのだ（『世阿弥行状記』）。

また家康は、「水も余りにきれいな魚は住まない」という言葉もよく引き

また家康は、「水も余りにきれいな魚は住まない」という言葉もよく引き

岡

2018年(平成30年)1月19日(金)

享月

日

楽斤

戦後70年が過ぎた今でも、戦争の被害者として、または加害者として苦しむ人たちがいる。性被害に遭った大陸からの引き揚げ者、試し撃ちの銃を捕虜に向けた元日本兵……。おぞましい戦争体験を強いられた人々の声を集めたドキュメンタリー「記憶の澱」が、日本テレビ系31局で昨年末から随時放送されている。番組は、制作した山口放送が昨年5月に初放送。戦争体験者の生々し



戦時に強いられた「性接待」の体験について証言した女性＝山口放送提供

おぞましい戦争体験

記者レビュー

い証言が話題となった。その後、日本放送文化大賞グランプリなど各賞を得たことで系列放送が実現した。

番組前半は、大陸から引き揚げる前に、ソ連兵による性暴力を見聞きした人々の証言で構成。胸に迫ったのは、強姦されるなら自死を選ぼうと毒薬を携帯していたと明かす当時19歳の女性による証言だ。「いつでも死ねる強い味方がポケットにあった」と言葉が重い。

加害の痛みも記憶の奥底にへばりつく。男性(97)は、中国人捕虜を並ばせ銃の試し撃ちを命じたと悔いる。部隊による性暴力も証言し、「中国の若い人にどんなことをやったのか」と苦い表情を浮かべる。

絶句する体験ばかりだが、現実に戻ったことである。このような体験が繰り返されないために、私たちは、目をそらさず、証言者の声に耳を傾けたい。日本テレビでは20日昼2時半から放送される。(小峰健二)

救済なき民間の戦災者

インタビュー

15万人戦没の沖縄 国民救わない理屈 今も政府の判断に

沖縄で開かれていた戦後日本のあり方は、基礎問題ではない。戦争時期、沖縄と南洋諸島などの戦場では、被害を受けた民間が、国に救済と補償を求めた。33日、那覇市で開かれた「沖縄・フィリピン戦没者の救済と補償」のシンポジウムで、戦後70年を振り返り、民間の戦災者への救済と補償のあり方をめぐり、政府の判断に委ねられている現状が明らかになった。

「戦後、旧軍人・軍属は、戦時中の被害をめぐり、国に救済と補償を求めた。33日、那覇市で開かれた「沖縄・フィリピン戦没者の救済と補償」のシンポジウムで、戦後70年を振り返り、民間の戦災者への救済と補償のあり方をめぐり、政府の判断に委ねられている現状が明らかになった。

井護士 瑞慶山 茂さん

1943年、パラオ生まれ。千原島弁護士会会長などを歴任。沖縄戦被害、南洋戦・フィリピン戦被害の各国家賠償訴訟弁護団長。

民間被害者の方や、自身が被害を受けた方、戦時中に被害を受けた方、戦後70年を振り返り、民間の戦災者への救済と補償のあり方をめぐり、政府の判断に委ねられている現状が明らかになった。

国境を超えた共感力 戦争防ぐ

大阪大学大学院准教授 木戸 衛一さん



1967年生まれ。専門はドイツ現代政治・平和研究。著書に「ドイツ政治社会と左翼党」。

第二次大戦の敗戦後、ドイツは、戦時中の被害をめぐり、国に救済と補償を求めた。33日、那覇市で開かれた「沖縄・フィリピン戦没者の救済と補償」のシンポジウムで、戦後70年を振り返り、民間の戦災者への救済と補償のあり方をめぐり、政府の判断に委ねられている現状が明らかになった。

月刊 安心新聞



神里達博
1967年生まれ。千原島大学教員。著書に「文明の危機」など。

仮想通貨の理念と課題

多様な応用に 知の協働を

最近また、「AIブーム」が起きている。AI（人工知能）は、人間の知能を模倣し、学習する能力を持つ。AIは、多様な応用に使われており、知の協働を促進している。

読者の広場



2011年3月11日14時46分、東日本大震災が発生した。緊急放送でテレビをつける、大津波に次々と飲み込まれる建物や逃げ惑う車、住民の悲鳴が映し出された。死者1万5894人、行方不明者2562人（16年2月現在）が犠牲となった。



磯江 公博

エナテクス常務取締役境港支社長

そして、ついに福島 第1原発が自動停止。非常用発電機は大津波で機能喪失し、注水不能でメルトダウン。さらに水素爆発で大量の放射性物質をまき散らした。原子力安全・保安院が発表した放射性セシウムは広島原爆の168個分。住民に避

そんな中、昨年12月13日、四国電力伊方原発に対し、広島高裁がまさかの運転差し止め判決を下した。理由は9万年前の阿蘇山巨大噴火の火砕流だ。火山国日本での「原発と共存」に対する司法の新しい視点での判断だ。さらに、政府の地震調

でエネルギーを国際融通するビジョンが動きだしている。まさに原発に代わる将来のエネルギー時代の幕開けだ。

脱原発エネルギー時代

難命令、最悪のシナリオがいまだ進行中だ。帰還困難区域の一部地域解除は、21年以降となる見通しだ。私たちは福島原発事故から「絶対の安全」はないことを学んだ。にもかかわらず、原発再稼働が次々と進められている。

「脱原発エネルギー時代」は既に一国では完結できないグローバル時代に突入している。地球人として国境や文化、宗教といった壁を克服し、持続可能なヨコ型社会を連携して創造する動きは、既にあらゆる分野で芽を出し始めている。

(湯梨浜町)

八雲立つ日本・出雲から「共生文化」の創造を

—新しい空間価値を生み出したシートシャッター「happy gate 門番」

1980年佐藤造機の依頼で折り畳み式防寒用シートシャッター製造に始まり、1986年現在の原型下水道用パイプにシートを巻き取る方式を開発。その後改良を重ね17万台を販売、追従する大手に先駆け、省エネ・防虫・防塵・防音・防爆等機能性を追求。食品、流通、医薬品、精密・電子機器等用途開発を進め、世界にシートシャッター市場を創造。高速開閉と高い気密性が認められ、築地市場に続き豊洲市場に150台を納入しました。

—I o T・クラウドの先駆け 水の総合管理システム「やくも水神」

1997年電電公社専用線で上下水道管理システムを島根県西部美都町に納入。その後県下20市町村で採用され、この実績を背景に2000年沖縄サミットで発表されたe-Japan構想を受けやくも水神を開発、出雲市に設置、全国展開を始めた。2003年松江発Ruby言語で再構築、データセンター東西2拠点、Googleマップ、ナウキャスト・ドコモクラウド基盤の導入等で信頼・利便性を高め、迅速な拡大・進化ができる体制を整えた。自治体の広域合併とスマホ・タブレット端末の爆発的普及を追風に、上下水道、農工業用水、消融雪、ゲート、アンダーパス、雨水管理、排水機場等で共創によるクロスオーバー管理が歓迎され460自治体10,000施設で採用され、震災復興を行っている福島県浪江町に納入、自然災害の頻発と上下水道料金の値上げから、市民社会にも関心が広がり更なる発展期を迎えています。

—人間自然科学研究所の取り組みと今後の展望

地政学をもとに「平和・環境・健康」と「対立から共生の文化へ」をテーマに、対立・統合・発展サイクルを具現化すべく「人間自然科学研究所」を設立。25年に渡り世界の平和記念館視察、国際シンポジウムの開催、孔子・孟子・孫子・周藤彌兵衛・ノーベル平和賞女性初受賞者ベルタ・フォン・ズットナーの銅像建立等を行ってきた。緊迫する朝鮮半島の対岸に位置し、戦後国内で唯一の県庁放火事件、国家プロジェクト中海干拓の誘致中断、特別な意味を持つ県庁所在地3基原発誘致、「竹島の日」の制定等を当事者意識として確立すれば、眠っている才能が開花、健康寿命が延び「共生文化」創造の適地とする、またとない時を迎えています。

一般財団法人 人間自然科学研究所 理事長
小松電機産業株式会社 代表取締役
小松 昭夫

事業経営の目的を人間の本来あるべき姿（真の健康）の追求と定め 社会問題を「哲学」「技術」「経営」の3方向から考察 時代の変化を追い風にマーケットを創造

「江戸末期、津和野藩（島根県津和野市）を脱藩した西周（にしあまね）は、明治初期に西洋文明を探求し、『philosophy = 哲学』『Mechanical Art = 技術』などの翻訳を考案、新しい文化の芽を生み出し、日本はもとより、韓国、中国にも大きな影響を与えた。この西周の志を現代に蘇らせ、望まれる空間価値を生み出す『happy gate 門番』、I o T・クラウドの先駆け、水の総合管理システム『やくも水神』、『対立から共生の文化へ』の転換が生まれる平和事業（人間自然科学研究所）の3事業を通して、『八雲立つ日本・出雲』が本質的かつ大きな役割を果たすときがきたと確信している」と小松社長。

「happy gate 門番システム」の開発のきっかけは、1980年、以前に勤務していた佐藤造機のアイデアで防寒用に開発した折り畳み式。1986年、下水用塩ビパイプを使用した巻取り式を独自に開発、現在の原型を完成。その後、防塵・防虫・防風・空調効果などの機能を高めシリーズ化を図り、国内外に高速シートシャッター市場を他社に先駆け創造した。

1991年「中小企業研究センター賞」「ニュービジネス大賞最高賞」受賞、1995年「科学技術庁第54回注目発明選定証」で先進性、独創性が高く評価され、2007年「国土交通大臣表彰」、2012年「happy gate 門番システム」が、経済産業省第4回「ものづくり日本大賞優秀賞」など相次ぐ受賞で、地方中小企業にも関わらず全国メディアに頻繁に取り上げられトップブランドが確立した。

「地球温暖化防止」「人の世界的な交流、滞在、移住」「食品・医薬品の流通拡大による安全性」が時代の本質的な要請となり、研究所の長年の活動と当社の事業文化があいまって「象徴ブランド」となる可能性が見えてきた。

門番ブランドが浸透し、2001年新たなマーケットの誕生が明らかとなったことから、小松社長は日本シャッター・ドア協会岩部金吾会長の要請により協会内に高速シートシャッター委員会を新設、初代委員長就任を懇願され、構造・安全・保守点検基準を策定。また、日本環境協会「エコマーク」を協会として初めて取得するなど、10年間に渡り初代委員長として業界の中心的な役割を果たした。さらなる飛躍的發展を目指し、次々と特許を出願、新しいジャンルを拓く開発を進めている。

業界唯一の移設間仕切用自立ユニット型、冷蔵冷凍庫仕様（マイナス40℃、）世界初完全防爆を目指したエアー駆動仕様、高温耐環境仕様（80℃）などさまざまな用途に適応できる商品を開発。島根と東京の異業種交流会から始まったイカリ消毒(株)、(株)大成ファインケミカル3社の20年に渡る信頼関係から生まれた「マジック

「オプトロン門番」は、誘引阻止率 80% の高い防虫性能をもつ外面グリーンシートと、虫の誘引色の原理を応用した内面イエローシートを採用し、工場内部への侵入を抑制。全ての門番シリーズ、及びシート取替え需要に対応する。累計販売台数は 17 万台に達しているが、これからが本番。業界最速の上昇速度 3.2 m/秒、静音・高耐久・省メンテナンスの門番チューブ採用と、事業文化であるイノベーション（新結合）で本質的な社会貢献の準備が整ってきた。

小松社長は「地球最大のユーラシア大陸の東端、日本海・東海を隔てた朝鮮半島の対岸の島国・日本。産業革命以降の地政学的背景から生まれた諸問題（従軍慰安婦、強制労働、竹島＝独島、日本海＝東海呼称のほか尖閣諸島、南沙諸島）に、緊迫する朝鮮半島情勢が重なり、北東アジアは抑制された究極の対立状態に陥っている。加えて、島根県松江市は国内で唯一、県庁所在地に立地する島根原発を抱えている。世界でも例を見ない、原発 10 キロ圏内にオフサイトセンター（緊急事態応急対策拠点施設）、県庁、市役所、市立病院、赤十字病院等重要施設が集積、また避難区域に指定された 30 キロ圏の中海・宍道湖周辺人口は約 47 万人に及ぶ。社会問題こそ経営資源。今こそ、我々の智慧と勇気が試されている。朝鮮半島と日本列島から世界恒久平和への流れを生み出す好機だ」と語る。

明治以降の近隣諸国に対する加害国、人類史上初の核による無条件降伏国の事業家として、人間自然科学研究所と共に進む事業遂行姿勢が、世界で生きることを宿命付けられた極東の島国日本の、理想事業経営モデルとして、驚異的なスマートホンの世界的普及を背景に、高い信頼の源泉となっている。

「happy gate 門番システム」は、ユーザーニーズを先取りする形で改良・進化を続ける。業種別の販売割合をみると、食品関連 25%、自動車関連 10%、精密機器・金属関連 10%、店舗関連 10%、医薬品関連 5%、物流施設 5%、印刷関連 5% で販売全体の 7 割を占めている。その他にもプラスチック製品関連、電気機械器具関連など、さまざまな分野に用途を拡げ、「happy gate 門番」のブランド力に揺るぎはない。さらに海外では、韓国「コマツコリア」、「タイ事務所」を中心に韓国、中国、タイなど、東アジア・東南アジアで販売し施工ネットワークの構築に取り組み、更なる新しい用途の発見、需要拡大に力を注いでいる。

2017年8月11日 ハルバート (Homer B. Hulbert) 博士 68 周忌追悼式 挨拶 (韓国)

人類史における究極の「戦前責任」を問われる

ホーマー・ハルバート博士 68 周忌追悼式にあたり、ご挨拶の機会をいただき、感謝申し上げます。

私は2014年3月、安重根義士殉国104周年の記念式典で、孫黄恩珠氏、曾孫安寶榮氏の前で「安重根義士は、民族の英雄に止まらず、人類の英雄にすべきである」と申し上げ、参列者の熱烈な賛同を得ました。その安義士に「韓国人であれば一日も忘れてはならない人物」と言わしめたのが、米国人ハルバート博士だとお聞きしています。

博士が大韓民国（韓国）で活動された19世紀末から20世紀初頭は、人類史的な激動の時代で、1914年に人類初の総力戦第一次世界大戦がヨーロッパで勃発しました。日本は国策を誤り薩長土肥と公家が合体し、権威と権力を統合。1872年～1879年の琉球処分を経て中央集権国家を誕生させ、覇道の道を進むようになりました。その後日清戦争を経て台湾を併合、中国に侵攻しました。日露戦争後の1905年乙巳（ウルサ）条約（第二次日韓協約）によって韓国の外交権を奪い、1910年に韓国を併合しました。世界列強に向けて、韓国の自主独立を主張するため、博士は1907年、第2回ハーグ平和会議に特使を送ることを発案されました。

その特使のひとり李儼烈士が客死されたオランダ・ハーグのホテルが、記念館になっています。2012年、李儼記念館を訪問し、私と特別の縁のある安義士の遺墨「獨立」のレプリカを展示しました。

この第2回ハーグ平和会議の出席者の中に、オーストリアのベルタ・フォン・ズットナーがいました。ズットナーは1889年、ベストセラー小説『武器を捨てよ！』、1912年、論文『空の野蛮化』を発表、戦争阻止を世界に訴え、国際的な平和活動を展開、1905年に女性初のノーベル平和賞を受賞しました。

※ 2018年3月13日、INMP（International Network of Museum for Peace 平和のための博物館国際ネットワーク）の名誉統括コーディネーター、英国ブラッドフォード大学平和学講師（1976～2015）のピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士（Dr.Peter van den Dungen）より、「1907年、李儼達の使節団がハーグ平和会議への出席を拒否されたとき、ズットナーは彼らを支援していました」との情報が寄せられました。

2013年、米国のアンドリュー・カーネギーの寄付でハーグ市に建設された「平和宮（現国際司法裁判所）」100周年記念事業のひとつとして、「世界の平和フィランソロピスト20人」展が行われ、私もそのひとり選ばれ、パネル展示されました。その開会式に合わせて、ズットナー胸像の除幕式が行われ、胸像制作者であるオランダの彫刻家イングリッド・ロレマ氏と出会い、そのお人柄と深遠な念いの伝わる像に魅了され、カーネギー財団の賛同を得て、2体のズットナー像を制作していただきました。ズットナー像が「特別の平和使節」として世界を回り、その志が現代によみがえり、確かな平和への流れが始まることを願っています。

韓国独立運動にまい進されたハルバート博士は「韓国人より韓国を愛した、韓国の永遠の友」とも言われており、韓国の文化を世界に広める役割も果たされました。同時代の19世紀末、ギリシャ生まれのアイランド人作家ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が日本島根県松江市で教鞭をとり、欧米に初めて本格的に日本文化を紹介しました。今、ハーンの異文化に心を開く「オープンマインド」を評価する機運が高まっています。ハーンは、日清戦争後の日本の風潮に、こう警告を発しました。「おそらく、日本の将来の危機は、実にこの途方もない、大きな自負心にあるといえるだろう」（『心』1896年）。このハーンの指摘どおり日本は道を誤り、貴国に大きな災難を与えました。「戦後責任」を果たす立場の日本人の一人として、心より謝罪を申し上げます。

今、世界は第一次世界大戦前の状況と酷似しているとの指摘があります。

人間自然科学研究所は、1997年から世界の戦争・平和記念館を訪問、学習・献花・寄付を行うなどの活動続け、紛争・戦争に至る背景と経緯と実態を研究、「戦前責任」「戦中責任」「戦後責任」の3つに分けて考察してきました。

今のままでは、日本、韓国、朝鮮民主主義人民共和国（共和国）、そしてアメリカ合衆国（米国）・ロシア連邦（露国）・中華人民共和国（中国）の3大核大国の指導者は勿論、国民一人ひとりが、人類史における究極の「戦前責任」を問われる立場になります。

加害の歴史を持つ日本国民が声をかけ、被害の歴史を持つ共和国、韓国に語り、この地域に本質的な影響力を持っている米国・露国・中国の賛同を得て世界の期待を担う平和事業を興すことにより、「対立の文化から共生の文化」への転換を促し、朝鮮半島と日本列島から世界恒久平和への流れを起こすことが熱望されています。

最後に、本日、このような機会をいただきましたハルバート博士記念事業会の金東珍会長様、金会長をご紹介いただいた『英雄』誌の朴昌宰社長様に厚く御礼を申し上げます。

<2017年8月11日、「ホーマー・ハルバート博士68周忌追悼式」が、韓国ソウル麻浦区合井洞所在の楊花津外国人宣教師廟院にて開催された。主催の社団法人ハルバート博士記念事業会より小松昭夫理事長に招待状が届いたが、入院のため出席できず、コマツコリアの尹熙竣理事が名代として出席、この追悼文（一部加筆）を代読。尹氏は「式典で挨拶された6名の中、一番長い文書でしたが、皆さんが真剣に耳を傾けてくださり、読み終えた後には、多くの拍手を頂きました。席に戻ると『素晴らしい文書でした』、『まさに戦前責任が問われるタイミングです』と声を掛けてくださいました。中でも、「文化遺産国民信託」の金宗圭理事長が強い関心を示され、小松理事長と面会する流れができました」と報告している。>

一般財団法人 人間自然科学研究所 理事長
小松電機産業株式会社 代表取締役
小松 昭夫

代読：尹熙竣（KOMATSU KOREA 理事）

人間自然科学研究所 構想ストーリー

◇世界は今

2018年2月2日、アメリカ合衆国（米国）トランプ大統領が、新たな小型核兵器の開発や、非核攻撃への反撃にも核を使用する可能性を明記した「核戦略見直し」指針を発表。「核なき世界」を掲げたオバマ前政権の方針を大きく転換し、中華人民共和国（中国）やロシア連邦（露国）、朝鮮民主主義人民共和国（共和国）への対抗姿勢を鮮明にしました。

1月25日に発表された、人類絶滅までの残り時間を示す「世界終末時計」は、核戦争の危険性の高まりを受けて2017年から30秒進められ、2分前となっています。「世界終末時計」が最初に発表された1947年には7分前でした。2分前というのは、米国とソビエト連邦（ソ連）が相次いで水爆実験に成功した、冷戦期の1953年に並ぶ、過去最短の時間です。

人類は、火の利用、言葉の発明、分業により進歩。火は火薬、ダイナマイトを経て、究極の火・核に。言葉は文字、印刷術を経て、クラウドとスマートフォンに。また通信（I o T）人工知能（A I）の驚異的進化は止まることを知りません。分業は、国際分業が機能しなければ、どの国も成り立たない時代になっています。

そして今、人類は、核兵器の脅威、原子力発電所の世界的な普及、情報・物流革命、株式市場や仮想通貨市場の乱高下が示す国際経済・金融の動揺、さらには火山の噴火、大地震（とりわけ日本では、政府の地震調査委員会が今後30年以内に南海トラフ＜静岡県～九州太平洋側＞でマグニチュード8～9級の巨大地震が発生する確率が70～80%と予測）、大型台風など温暖化にともなう異常気象等々、地球規模の自然の脅威の高まりも重なり、歴史的な大変動期に突入していると思われます。

危機には「危険」と「好機」がひそんでいます。

このまま「世界終末」に向かって突き進むのか、「楽しく持続的に生きられる地球社会」の実現に向けて進化するのか。その分水嶺に立って、人類史上初の大変動を「追い風」として活かす、智慧と勇気が試されています。

◇対立の文化から共生の文化へ

朝鮮半島、日本列島、沖縄諸島、台湾諸島、北方四島は、産業革命以降の地政学的背景から生まれた諸問題（従軍慰安婦問題、強制労働問題、竹島＝独島問題、日本海＝東海呼称問題）に、共和国の度々の核・ミサイル実験が重なり、抑制された究極の対立状態に陥っています。この対立こそ、核廃絶、世界恒久平和の入り口であると確信しています。

朝鮮半島と日本列島は米国、露国、中国の3大核大国の勢力が拮抗する結節点です。

人間自然科学研究所は、紛争・戦争に至る背景と経緯と実態を研究、「戦前責任」「戦中責任」「戦後責任」の3つに分けて考察してきました。

今のままでは、日本、大韓民国（韓国）、共和国、そして米・露・中の3大核大国の指導者は勿論、国民一人ひとりが、人類史における究極の「戦前責任」を問われる立場になります。

研究所では、人類進化のストーリーを生み出すために、共感のステージをととのえ、対立・統合・発展のサイクルがスパイラル状に繰り返され、人間の能力が次々に開花する「新しい和の文化」の創造、「対立の文化から共生の文化へ」を命題に掲げています。

今こそ、朝鮮半島と日本列島から「究極の対立の文明から共生の文化」を生み出す好機ととらえ、世界恒久平和への流れを生み出すときです。

産業革命は、18世紀、ユーラシア大陸の西端の島国・イギリス（英国）で始まりました。アジアで最初に産業革命を起こしたのは、ユーラシア大陸の東端、世界最大の海・太平洋に面した島国・日本でした。

欧米列強の圧迫によって開国し、不平等条約を結んだ日本は、薩長土肥と公家が合体し、「権威」と「権力」を統合、中央集権国家を誕生させ、「殖産興業・富国強兵」を掲げ、近代化を進めました。その後、1872年～1879年の琉球処分によって沖縄を「植民地」としたのを皮切りに、日清戦争で台湾、日露戦争で南樺太・朝鮮半島、日英同盟に基づいて参戦した第一次世界大戦で中国山東省、その後中国北東地域、南洋諸島と植民地を拡大していきました。

中国革命の父と言われる孫文は、1924年（大正13年）神戸で行った演説で、「日本は武力の文明である西洋覇道より、道徳、仁義を本質とする文化である東洋王道をめざせ」と警告しました。

しかし、日本は国策を誤り、覇道の道を突き進みました。挙句、第二次世界大戦で、人類史上初めて使用された核兵器によって無条件降伏しました。

戦後、朝鮮戦争特需を経て、東西冷戦のはざまで「高度経済成長」と言われる一時の繁栄もありましたが、今、行き詰っています。日本のみならず、アジア、世界も行き詰っています。

今日に至った背景・経緯・原因を研究、現状を直視し、あらゆる問題を人類の特性・人類史・世界・基本的人権という高次元の視点でとらえ直すことによってこそ、日本・アジア・世界の未来が見えてきます。

◇平和事業

日本は、1945年8月15日のポツダム宣言受諾、無条件降伏をラジオで国民に知らせた昭和天皇の放送日を終戦記念日と定めています。人間自然科学研究所はこの「終戦」という言葉を「戦争の終焉の先がけを務める」と再定義し、「平和の事業化」を提言しています。

山積する問題を「戦後責任」という視点で捉えると、怨念・対立のエネルギーを昇華し、加害側・敗戦国である日本と、被害側の韓国・共和国が一緒になって「平和事業」に取り組むという道が拓けます。

海外からの共感を得られない提言は具現化できません。逆に言えば、国境を超えて共感さえ生まれれば、今は実行できる最高のチャンスです。

「平和の事業化」の第一の提案は、沖縄（または誘致希望地）において、人間の才能が次々に開花し、人類の未来が拓けるきっかけを提供する施設として「国際平和センター」を創設する提案です。

1879年、明治政府の琉球処分により日本に併合され、500年続いた琉球王国が滅ぼされ、沖縄県になりました。沖縄は「出会えば兄弟」という言葉があるように「平和の島」でしたが、太平洋戦争末期の沖縄戦では約20万人が犠牲となり、「被害の島」になりました。第2次世界大戦末期の日本本土爆撃、その後朝鮮半島、ベトナム、イラク等への米軍前線基地として「加害の島」という側面も持つようになりました。このような沖縄の人類史的・地政学的な意味を研究する中から次の構想が生まれました。

- ① 世界中から近代の戦争の全戦没者電子データを受けとめ、永遠に記録、閲覧できる「メモリアルセンター」。
- ② 情報通信技術（ICT・IoT）で世界の戦争・平和博物館のネットワーク網を構築。各施設の資料と写真映像をリアリティをもって総合的に学ぶことができ、世界の戦争・平和博物館への案内役を務め、新たな智

を生み出す「世界戦争平和映像センター」。

これを沖縄または誘致希望地に建設する構想です。

「映像センター」構想については、南京大虐殺記念館の朱成山名誉館長より「喜んで協力します」というお言葉を頂戴しております。

習近平主席は「一带一路」構想を提唱されました。長い人類の営みから北極海の氷が溶け、北極海航路（氷上のシルクロード）が拓ける可能性が生まれています。沖縄とその近海、竹島＝独島・東海＝日本海に象徴される対立の地域が、「一带一路」構想がさらに進化し、アジア・ヨーロッパ・アメリカ大陸が結ばれる「世界縁結び 平和の特別聖地」となる可能性が見えています。

第二の提案は、3大核大国と世界の国々の賛同を得て、共和国の核放棄と世界すべての核保有国の核放棄を同時に実行、放棄された核兵器はすべて3大核大国に移管、朝鮮半島と日本列島の非核化を実現する。3大核大国は段階的に核削減し大国の人類史的な責任を果たす、という提言です。これを打ち出すことにより、3大核大国は大国としての国家の核心が生まれます。

第三の提案は、国民国連の樹立です。

2008年、北京で開催された、学苑出版社の『グローバル時代の人間学 中日韓英四カ国語による中国古典名言録』出版記念フォーラムで、「国民国連」の試案を発表しました。

このフォーラムに先立ち、小松理事長は、日中国交回復に尽力された蕭向前氏（中日友好協会副会長）の自宅を訪問。蕭先生は、2004年、CS放送・朝日ニュースターの特別番組「永遠の隣国として」（キャスターはばこういち氏、寺島実郎氏も出演）の中の、小松理事長を囲んだインタビューで、「侵略したことのある者が、それを認めるのは勇気あることです。知恵を持っていることです。ドイツを見なさい。ドイツはこの点ではるかに日本を超えています」と発言。4年前のこの言葉を受けて、小松理事長はこの度の訪問の締めくくりに、蕭先生の手を握り、「ドイツを超えます」と力強く表明しました。

現在の「国連」は「権力」である政府で構成され、第二次世界大戦の教訓から生まれた常任理事国5か国を中心に運営されています。一方、新しく構想した「国民国連」は、人類の特性と歴史的経緯を生かし、論理的討議を通じて、長い時間軸で道理を実現する道筋を生み出す、「国民代表」で構成され「権威」が生まれる集団です。

4万8千年前、アフリカを出た人類の祖先は、中国・朝鮮半島から九州、台湾から琉球列島、シベリアから北海道という3つのルートで日本列島に到達したと言われています。暖流に挟まれ、南北に長く、四季のある日本列島に到達した人々は、豊かな自然の恵みを享受できました。一方で、地震津波・台風・噴火など自然大災害に繰り返し襲われてきました。このため日本では、みんなで「力を合わせる」という文化が育ちました。

そして、天災を予測する人物に「権威」が生まれました。その権威のもと、秩序を作る役割を担うのが「権力」です。このように「権威」と「権力」を分けることによって、人々の全滅を防ぎ、生かして使うということが定着していったと推測されます。とくに、多くの小集落が分散して存在した山陰地域では、この「権威」と「権力」が分かれて生まれやすい環境だったと思われます。

「権威」の芯になってきたのが、天皇制でした。今上天皇は、国民に手を振り、ひざまずき、国民と同じ目

線で、国民に寄り添うという形をつくられました。結果として国民の「信」が得られ、これが、今上天皇の「権威」になりました。

ところが、核拡散、スマートフォン・クラウド、国際分業という状況を背景に、これまで人間がつくったものでは手に負えない時代になり、新しい「権威」を必要とするようになってきました。

この「権威」を、血統によるのではなく、新しい「文化」としてつくらなければなりません。

世界の新しい流れを生み出すプラットフォームを見出し、そのプロセスを映像で世界に発信し、文書で後世に残す。みんなが見守る中での、オープンな議論により、新しい智慧が生まれる。そのプロセスこそが永遠の「権威」であり、その場が「国民国連」です。

◇八雲立つ日本・出雲から陽が昇る

100年前、「オープンマインド＝開かれた精神」の小泉八雲によって初めて本格的に欧米に紹介された、国際文化観光都市・島根県松江市は、史跡・温泉に恵まれ、日本文化発祥の地、東洋のベニスとも称されます。近隣には、大山隠岐国立公園、ジオパークなどの豊かな自然、日本遺産第一号の三徳山三仏寺などの史跡があります。その全体をひとつの「庭園」と見ることもできます。そして、さらにその中に、日本一の中国庭園・燕趙園、日本一の日本庭園・足立美術館などの日本庭園がつくられています。

日本の神話と古代史に関して「記紀」と呼ばれる、『古事記』と『日本書紀』があります。『古事記』は、奈良時代の712年に、『日本書紀』は720年に完成した歴史書です。

一方、『出雲国風土記』（いずものくにふどき）は、733年に完成したもので、「国引き神話」を始めとして出雲に伝わる神話などが記載され、記紀神話とは異なる伝承が残されています。

神話は架空の物語とだけとらえがちですが、そこに「事実のかけら」「古代の現実」が織り込まれている部分があります。

たとえば「因幡の素兎」という神話は、ワニ＝鰐（サメ）を騙したために、皮をむかれて赤裸になった兎が、八十神と呼ばれる大国主命の兄神たちから「海水で洗って風にさらせばいい」と言われ、その通りにしたら更に悪化。そのあとからやってきた大国主命から「真水で洗ってガマの穂の上で寝るように」と教えられてそのとおりにしたところ治ったというお話です。

実は、蒲の穂の花粉には止血や傷の治癒などを促進する成分「蒲黄（ほおう）」が含まれる、と漢方生薬事典に載っています。つまり「因幡の素兎」のお話は日本で最も古い薬物使用の記述なのです。

そういう医学的な知識が古代の日本にあったこと、とくに大国主・オホナムチの神に代表される出雲の人々が、薬草の知識に長（た）けていたことを暗示しています。

『古事記』に薬が出てくるもう1つの場面があります。

先ほどの「因幡の素兎」の続き。大国主や八十神（兄神たち）が兎と出会ったのは、因幡の八上姫に求婚に行く途中。大国主に助けてもらった兎は、「あなたが八上姫をめとるでしょう」と予言する。その通り、大国主が八上姫に選ばれる。

そのため、大国主は八十神に恨まれる。帰り道、八十神は真っ赤に焼いた岩を赤猪だと言って大国主につかまえさせ、大やけどを負わせて殺す。

嘆き悲しんだ大国主命の母親が天のカミムスヒ（神産巢日之命）に助けを求めると、蛸貝比売〈きさがいひめ〉

＝赤貝と、蛤貝比売〈うむがい・うむぎひめ〉＝蛤が遣わされて、赤貝の殻を焼いた粉と蛤の身を磨り潰したものを乳状にして火傷した皮膚に塗り、大国主は蘇生した、という神話です。

その時の岩だというのが、鳥取県南部町の赤猪岩（あかいいわ）神社に祭られています。

日本最古の看護師ともいえる、2人の女神様は、出雲大社本殿の右横の天前社（あまさきのやしろ）に祀られています。

さて、鳥取県八頭町を中心に山陰地方に伝わる、火傷などの特効薬と『八上薬』という伝承薬があるそうです。赤貝の殻を潰し、蛤の身を使ってつくで、主成分はキトサンです。

蛤や牡蠣、それからカニやエビの殻に含まれているキトサンは炎症を抑える作用があり、人工皮膚などの原料として使われます。火傷の部位に人工皮膚を貼り、皮膚を回復させるという方法は現代でも基本的な治療法だそうです。

古代において、火傷には蛤と赤貝が効く、という専門知識があったことを物語っています。

※参考

①赤猪岩神社

<http://www.town.nanbu.tottori.jp/akaiiwa/3/1/>

②鳥取県南部町

<http://www.town.nanbu.tottori.jp/kanko/>

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E9%83%A8%E7%94%BA_\(%E9%B3%A5%E5%8F%96%E7%9C%8C\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E9%83%A8%E7%94%BA_(%E9%B3%A5%E5%8F%96%E7%9C%8C))

③板祐生出会いの館

<http://www.town.nanbu.tottori.jp/kyokai/tenji/5/01/>

『出雲国風土記』は意宇郡（おうぐん）から始まっています。松江市八雲町に源を発し、中海に注ぐ意宇川の「意宇」です。国庁所在地であった意宇郡は、古代出雲中心地であったと言われています。

『出雲国風土記』では「国引き」を終えた八束水臣津野命（ヤツカミズオミヅヌノミコト）が「お糸」といって杖を突いたので「意宇（おう）」という地名になったとあります。

近年、「意宇」は実はあの有名な毒草・烏兜（トリカブト）の古代名「於宇」と重なるという説が出てきました。トリカブトは漢方では極めて重要な薬草ですが、猛毒を持っています。それを減毒して薬にするのは当時の先進技術であり、中国伝来の先進バイオ技術を持ったハイテク医薬人集団がいたことから「意宇（おう）郡」と名付けられた可能性があるという説です。

太古より、出雲は、新しい文化発祥地にふさわしい背景とストーリーのある地域と言えるのではないのでしょうか。

世界の「縁結び」の地である出雲から、新しい共生の文化を生み出す以外に未来はない——これは人類史の必然であると認識しています。

◇新「ゆりかごから墓場まで」

第二次世界大戦中の1941年、英国のチャーチル内閣は、社会保障のあり方を研究する委員会を発足させました。この委員会が作成したプランを基に、戦後の1945年、イギリス最初の労働党単独内閣であるアトリー内閣によって、医療費の無料化、雇用保険、救貧制度、公営住宅の建設など体系的な社会保障制度が実施され、「ゆりかごから墓場まで」と言われる「福祉国家」建設が本格化しました。

英国の社会保障制度は先進国のモデルとされ、その後の保守党政権でも継承されましたが、1970年代後半になると福祉政策が財政を圧迫して経済発展が阻害され、また産業国有化政策による国民の労働意欲の低下などの問題が指摘されるようになり、「イギリス病」とさえ言われるようになりました。

そこで、1980年代のサッチャー保守党政権は、民営化と共に福祉国家の縮小を掲げ、「小さな政府」への方向転換を図りました。これにより、経済は活性化しましたが、一方で貧富の格差の拡大、若年層の失業の増加、犯罪の増加など社会の荒廃という弊害をもたらしました。

その後、労働党と保守党の政権交代が繰り返されましたが、英国の福祉政策は行き詰まっているのが現状です。行き詰っているのは英国に限りません。日本を筆頭に、各国中央銀行と政府との癒着による財政赤字が蔓延しています。先進国においては、女性、子供をはじめとする大量の貧困層が出現。ノーベル平和賞を受賞したグラミン銀行（バングラディッシュ起源。無担保、低金利の小口金融）が、日本を含む世界各国に普及するようになっています。

「健康・環境・平和」を命題に掲げる人間自然科学研究所は、日本における、新しい「ゆりかごから墓場まで」を提唱し、次の3つの課題に取り組みます。

- ① 才能が次々に開花するために、幼児教育、義務教育、高校・大学など高等教育の改革。
- ② 人類進化のストーリーを生み出すために、地域の風習、習慣（言語・文字を含む）、祭をはじめとする地域の行事など伝統文化、史跡などの歴史資源を生かす。
- ③ 森羅万象（海・山・植物・動物・昆虫）と人間との関わり、死生観を本質的に見直し、「命とは何か、人間とは何か、真の健康とは何か」を再定義するなかから新たな文化と行動を生み出す。

◎「知的高齢者終身活動拠点」構想

——真の健康のために

<目的>

「楽しく持続的に生きられる地球社会」の実現を目指して、中海穴道湖圏を地政学的・歴史的観点から捉え、未来を展望するため、健康・環境・平和をテーマに「知的高齢者終身活動拠点」を建設します。

高齢者問題を社会の荷物という単なる老人福祉・介護としてではなく、豊富な体験・知的財産が青少年の心の教育、心の進化を促すのに役立つ「知のリレー」により、新しい知と文化の発信源とすることを目的とします。次代を担う人財が次々と輩出され、全国世界に伝播することで、恒久平和と「真の健康」（元気、長生きで社会的な役割を果たす中で死を迎える）の生まれる環境創造のモデル事業として、本構想を立案します。

<場所>

米子市夜見町

<特徴>

- 1、高齢クリエイターが弟子と共に過ごし、新たな出会いの場があり、未来への架け橋となる「悠久の縁結びの地」。
- 2、様々な分野のクリエイティブな人たちが集まり、最も新しい進化した智恵を目指す場所。この世とあの世、双方の縁を結ぶ場。
- 3、食・運動・思考・感性・学び等、生活の中に予防医学をシステム的に取り入れ、真の健康状態をつくる。
- 4、そこは、弟子への「知のリレー」の場。コミュニケーション能力、新しい知を生み出す訓練をし、政治・経済等に関する新しいカルチャーを創る。
- 5、幼児教育の施設を併設、各年代層の価値観別塾を開講し、21世紀の文化と教育システムの再定義、確立を目指す。
- 6、キーワードは「メカニカル・アート（技術）」。その中でカギを握るのが「フィロソフィー（哲学）」。
- 7、才能が開花すると、そこにはヒト・モノ・カネがついてくるから、死ぬまでお金に困ることはない。
- 8、このシステムを新しい文明として世界に発信し、フランチャイズ化する。
- 9、中国の「一带一路」政策の重要拠点であり、医療・健康・福祉産業のモデル地区である天津市との連携を入り口とする。

<周辺環境>

- 1、葬祭会館（メモリアル・米子）の隣接地（死生観を見直す、葬祭の意義とあり方の新たなモデルの構築）。
- 2、米子鬼太郎空港から10分。
- 3、ウラジオストク（露国）、東海（韓国）を結ぶフェリーが発着する境港から20分。
- 4、近くに皆生温泉その他の特色ある温泉多数。
- 5、大山隠岐国立公園（大山はブナ林、ゴルフ場、スキー場、乗馬、新しい農業等、様々な可能性が見られる）、山陰ジオパーク、白鳥の渡来地・水鳥公園（中海）など自然との共生の場に恵まれている。
また、弓ヶ浜海水浴場、砂風呂、ヨットハーバー、漁港、水産養殖及び水産加工、水産市場も隣接。
- 6、古代遺跡に裏付けされた日本神話の地。中海・宍道湖圏の神社と仏閣が多数あり、古代を偲び感謝の心が湧く。

一畑薬師寺周辺には薬草が豊富（100種にのぼる）。

日本遺産第1号の三徳山と精進料理。

- 7、日本一の中国庭園・燕趙園、日本一の日本庭園・足立美術館。

<入居条件>

- 1、終身居住権が保証されるが、相続・転売不可
- 2、永代供養を施設全体で行う
- 3、健康で50歳以上の人で一人又はペア

＜入居資格＞

- 1、長期間海外滞在経験がある日本人及び長期間にわたり日本に滞在する外国人で、見識が高く、外国語、日本・外国の歴史・文化、社会情勢等に関する専門知識が豊富な人
- 2、平和事業はじめ人間自然科学研究所の構想の趣旨に賛同する人
- 3、青少年・若年者に対する教育に熱意がある人
- 4、クリエイティブな「場」とするため、コースを設け、試験に合格しなければ、上位のコースに移れない。

◇小松電機産業株式会社

小松電機産業は、小松昭夫代表取締役が28歳の時、勤務先の倒産を契機に、弟・小松光雄常務取締役と2人の就職支度金30万円を元手に、島根県八雲村（現・松江市八雲町）で、第一次オイルショックが起きた1973年に創業。30万円のうち20万円を工具箱、中古小型トラックの購入と、仕事場にするため自宅納屋の改装にあて、残った10万円と共同磁石式置型電話1台でポンプ修理、電装品組立業からスタートしました。配電盤ローカル企業として軌道に乗るも、電気工事業界ぐるみの過酷ないじめに遭い、業種転換。

1981年、社は「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」を定め、後に経営理念「おもしろ、おかしく、たのしく、ゆかいに」、行動指針「三方良し、後利」を追加。

「新市場創造型企業」として、シートシャッター「門番」、水総合管理システム「やくも水神」という2つの異なった、持続する世界的市場を創造し、ブランドを確立しています。

◎「やくも水神」

クラウド・IoTの世界の先駆け「やくも水神」は、世界で初めて携帯電話にインターネット機能がついたNTTドコモ・iモードの発売と、2000年沖縄サミットで発表されたe-Japan構想を機に、出雲市から全国展開が始まりました。広域クロスオーバー管理を目指し、松江市で生まれたオープン言語RUBYで構築されており、現在、460自治体、1万施設で使われています。

2010年、野村総研主催「NRI未来創発フォーラム」、2013年、国交省による先進事例として紹介されました。また2016年「ドコモ・クラウド基盤」の導入を契機に、テレビ会議システムと3台の高機能プロジェクターを組合せた遠隔緊急対策本部の立ち上げ、システムの多拠点化を目指しています。これらの推移はドコモ法人向けサイトでも二度にわたり紹介されました。

さらに、「楽しく、持続的に生きられる地球社会」「人が人らしく生きられる社会」の創造を目指し、AI、ロボットを組み入れて進化させ、日本全国・アジア・世界へ本格的に羽ばたく日が近づいています。

地球には、およそ14億km³の水があると言われています。しかし、そのうちの97・5%は海水で、淡水は2・5%しかありません。しかも、この淡水の大部分は南極や北極地域などの氷や氷河として固定されているため、河川や湖沼など人が利用しやすい状態で存在する水の量は約0・01%でしかないのです。

現在、世界の総人口は70億人を超えており、2050年には90億人を超えると予測されています。国連の報告によれば、現在、世界人口の5分の1、約13億人が安全な水を確保できずに苦しんでいるとのこと。そして、「2050年には30億人が水不足に苦しむようになるだろう」との予測もあります。

「20世紀は石油をめぐる戦争だった。だが21世紀は水をめぐる戦争の時代になるだろう」。1995年、世界銀行の副総裁だったイスマイル・セラゲルディン氏は、こう指摘しました。

「水の情報は平和の源」です。広く世界に呼びかけ、このプロジェクトへの賛同者と共に、導入地域の発展と、

世界恒久平和に向かう流れを生み出したいと念じています。

◎「門番」

地球温暖化防止と食品・医薬品の安全、各種製造サービス業の環境革命の象徴商品「happy gate 門番」。当社が世界で初めてマーケット創造した、累積出荷台数 16 万台の高速シートシャッターで、工場・商業施設の空間価値をプロデュースしています。

1985 年に開発・発表し、1991 年中小企業研究センター賞、ニュービジネス大賞、1995 年科学技術庁注目発明選定証、2007 年国土交通大臣賞、2012 年経済産業省ものづくり日本大賞優秀賞、その他国内外で数々の賞を受け、2012 年、小松社長が藍綬褒章を受けました。

「門番」開発の契機となったのは、工場の「3 K（きつい・汚い・危険）」という問題でした。「社会問題が経営資源」というのは当社の一貫した理念です。

経営とは「問題」を

- ① 解決することで十分に効果が期待できること
- ② 解決の方法はあるが、費用の割に効果が少ないこと
これらの問題をいくつか貯めておき一気に解決をする
- ③ 歴史的・心情的に解決が難しく棚上げすること

の 3 つに分けることです。

そして、人類の特性と地政学（歴史）を学び、時代の流れを読み、棚上げした問題を組合せ、順序を踏んで、情報・物流・金融進化による価値観の変化の流れを捉え、仕掛けて待つことで「問題を活かし大きな価値を生み出す」ことができます（革命）。ヨーゼフ・シュンペーターが 100 年前に提唱したイノベーション（新結合）が重要な意味を持ててきます。

地球温暖化と、人の大量移動の現代において、食品・医薬品分野でトラブルを起こせば、一国のみならず多くの国々に波及します。「門番」は、とくにこの分野においてなくてはならない象徴商品であり、人類進化に向かう流れの「入口」、「革命」の原動力です。このプロジェクトへの賛同を、広く世界に呼びかけます。

追記（2018/02/14）

《参考資料》

◇アイデアのひらめく環境

11 世紀の中国の詩人・文学者・歴史学者の欧陽脩（おうようしゅう）は、文章を考えるのに最も都合がよいという三つの場面について、こう述べています。「余、平生作る所の文章、多くは三上に在り。乃（すなは）ち馬上（ばじょう）・枕上（ちんじょう）・厠上（しじょう）なり」（『帰田録』から）

「三上」とは、馬に乗っているとき、寝床に入っているとき、便所に入っているときを意味します。

※参考 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AC%A7%E9%99%BD%E8%84%A9>

この「三上」は、「アイデアがひらめく3つの場所」としても応用することもできるのではないのでしょうか。

※参考「アイデアのひらめき方」

<http://preneur-preneur.com/how-to-hit-upon-a-great-idea/>

現代において「三上」のひとつにあたるのが、列車の中です。

出雲にかかる枕詞の「八雲立つ」（やくもたつ）にちなんで名づけられた、JR西日本の特急「やくも」は、岡山駅～出雲市駅間を山陽本線・伯備線・山陰本線経由で運行しています。

「やくも」は、車体と台車の間に「コロ」と呼ばれるローラーがあり、カーブにさしかかると振り子のように遠心力で車体が傾き、カーブ区間でも高速走行できる「自然振り子式」の電車です。

人間自然科学研究所の小松昭夫理事長は「普通車では激しい揺れになるが、グリーン車の揺れは心地よく、肉体は休息状態で、脳の日頃使っていない部位が活性化し目標が定まったり、具現化するための手順・アイデアがひらめく環境としてやくも号沿線の風景と独特の揺れは、『対立から共生の文化へ』の転換にとって必要不可欠と、私の経験から見出したこと。関心のある学者が世界から集まってきて、これを脳科学的、医学的に解明することを提案したい」と言います。

JR西日本では、2022年を目途に新型車両を導入する方針で、「制御付き自然振り子車両」「空気ばね式車両」などの効果を研究するため、岡山駅～備中高梁駅間で試運転が始まっています。さらに、「アイデアのひらめく環境」としての「やくも」号に期待が高まります。

岡山～米子を結ぶ伯備線の特急「やくも」は、岡山県新見市と鳥取県日野郡日南町の間にある、標高約500メートルの谷田峠（たんだだわ）で、高梁川水系と日野川水系の分水嶺を通過します。それまで進行方向とは逆に流れていた川が、一転、進行方向に流れ始めます。

沿線の溪谷美と大山の雄大な景観とあわせ、分水嶺を目の当たりにするという得難い体験のできる環境は、現代の「馬上」として、研究に値すると言えるのではないのでしょうか。

大林宣彦監督 次回映画制作に向けた手紙

大林宣彦 様

次回映画作品へのご提案

拝啓 早春の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
初めてお便りさせていただきます。

「映画は歴史を変えられないが、未来を変える力がある」「映画によって戦争のない平和な世界ができると信じて作り続ける」——報道で、大林宣彦様の信念に触れ、ご高齢の身と癌という病を受け止め、メディア・映画に関わる世界の人間・特に日本人のやるべき事を政治混乱の中、人類史的視点から精力的に映画制作に取り組まれているお姿を拝見して、感動いたしました。「戦争がすぐそこに近づいていると、みんなが肌で感じる時代になってしまった」という強い危機感にも共感いたします。

そして、「日清・日露戦争から広島への被爆の日までを一本の筋に」「なぜ原爆投下に至る道筋を人間がたどったのかを描く」という、次回作品の構想を知りました。

はなはだ失礼と存じますが、「構想のお役に立てないか」と思い、資料を送らせていただきます。

一般財団法人人間自然科学研究所は、地政学をもとに「平和・環境・健康」、「対立から共生の文化へ」をテーマに、グローバルに共感の舞台を整え、対立・統合・発展サイクルが人類進化を目指して廻りだすことを信じ、多くの国際シンポジウム開催、韓国独立記念館、中国人民抗日戦争記念館はじめ世界の戦争・平和記念館を訪問、学習・献花・寄付を行う活動を続け、映像に残しホームページに掲載しています。

◇これまでの研究と考察

徳川家康は、豊臣秀吉の朝鮮出兵による負の遺産を受け止め、朝鮮通信使制度の確立、1610年、琉球王国の尚寧を、一国の王として丁重に礼遇。これに対し、1879年明治政府は琉球処分で日本に併合し、500年続いた琉球王国を琉球処分で沖縄県とし、尚王家は日本の大名と同じ、伯爵の称号を与え東京に移住させました。これが、近隣諸国内政化政策（植民地）の始まりで、台湾、南樺太、朝鮮半島、中国山東省、中国北東地域、南洋諸島と拡大していきました。

1890（明治23）年に来日した、ギリシャ生まれのアイランド人作家ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）はアメリカ・サンタクララの記者を経て来日、島根県松江市で教鞭をとり、欧米に初めて本格的に日本文化を紹介しました。ギリシャで研究されたハーンの異文化・異民族に心を開く「オープンマインド」が、人類の未来を開く鍵になるとの可能性が語られるようになりました。日清戦争後の1895年、ハーンは「神戸クロニクル」紙の「戦後」と題するエッセイで、こう指摘しています。

「おそらく、日本の将来の危機は、実にこの途方もない、大きな自負心にあるともいえるだろう。」（人間自然科学研究所発行『朝鮮半島と日本列島の使命』7頁に掲載、出展：『東の国から・心』平井呈一訳、恒文社発行）。また三民主義の旗を立て、中国革命の父と呼ばれる孫文は、1924年（大正13年）神戸で行った演説で、「日本は武力の文明である西洋覇道ではなく、道徳・仁義を本質とする東洋王道をめざせ」と警鐘を鳴らしました。兵庫県神戸市舞子浜他、上海、武漢、南京、広州、香港、中山、台北、シンガポール、マレーシア・ペナンに、12の記念館が作られています。

幕末に「道」を誤り、1868年戊辰戦争・明治維新、1877年西南戦争後、孫文の忠告を無視、1894年日清戦争、1895年乙未事変（三浦梧楼公使を首謀者とする一団が李氏朝鮮の閔妃＝明成皇后を王宮の寝室で暗殺、遺体を焼却、全員無罪）を経て1904年日露戦争に突き進み、1909年ハルビンで安重根による伊藤博文射殺、1910年韓国併合、1931年満州事変、1937年盧溝橋事件により日中戦争が泥沼化、1939年第2次世界大戦の勃発を機に1940年日独伊三国同盟締結、1941年真珠湾攻撃で太平洋戦争に突入、大戦末期の1945年2月ロシアのクリミアで、ヤルタ会談（アメリカ・ルーズベルト、イギリス・チャーチル、ソ連・スターリン）で戦後処理の基本方針と日本分割統治協議、1945年7月ドイツのポツダムで、ポツダム会議（アメリカ・トルーマン、イギリス・チャーチル、ソ連・スターリン）が開催され、ポツダム宣言（トルーマン、チャーチル、中華民国の蒋介石）が発表された。このポツダム宣言黙殺の日本報道を受け、これを理由に1945年8月6日・9日に人類史上初めて、広島・長崎へ原爆投下、15日に昭和天皇の無条件降伏放送でポツダム宣言受諾を発表・9月2日ペリーの星条旗を掲げた戦艦ミズーリ艦上においてポツダム宣言受諾の調印を行い日本の無条件降伏が確定しました。

こうした25年の研究と活動実績を映像化し、島根・鳥取・沖縄を起点に、朝鮮半島と日本列島から人類の「対立から共生の文化」が生まれる平和事業構想具現化の準備をしてきました。

「国際平和センター」を沖縄、または誘致希望地に建設するという構想です。

① メモリアルセンター

世界中から近代の戦争の全戦没者電子データを受けとめ、今も増え続ける犠牲者を含め永遠に記録、閲覧できる「メモリアルセンター」。

② 世界平和映像センター

情報通信技術（ICT・IoT）を生かし、世界の「戦争・平和博物館」をネットワーク、それぞれの施設が持つ貴重な資料や展示状況をリアリティに富んだ写真・映像で体感、それぞれの記念館と直接コミュニケーションがとれる環境を整える。世界の戦争・平和博物館への案内役。総合的に学び、新たな「智」を生み出す拠点。

◇ご提案

この平和事業の参考館のひとつとして、鳥取県南部町の「祐生出会いの館」をご紹介します。

板祐生（本名 愈良＝まさよし）は1889（明治22）年、鳥取県西伯郡東長田村（現南部町）に生まれました。高等小学校卒業と同時に14歳で代用教員となり、19歳の時、検定試験に合格して正式教員となりました。終戦と同時に教職を退き、1955（昭和30）年、西伯町発足時に開設した保育所長となりましたが、翌年2月に他界しました。祐生の業績は数多の物の収集と、ガリ版を使った孔版画を芸術に高めたことに尽きます。祐生は1919（大正8）年、東京の多能趣味33人の会「我楽他宗」に入会して収集のあり方を学び、本格的に収集するようになりました。祐生はこの人たちと風雅な作品を交換して楽しみましたが、経済的には無力であり、送られてきた郷土玩具等をガリ版で孔版画に表し、私家本を発行してお礼に代えました。

祐生の遺したものは、4万点に上ります。満州国資料をはじめ、絵葉書5千点、ポスター1400点、駅弁掛け紙1300点、泥面子900点、土人形860点、趣味手拭500点、絵馬300点等々多岐にわたります。「後世の参考とする」願いを込めたこれ等の収集物は、今となっては貴重な資料です。一方、お礼として制作したガリ版の孔版画は、武井武雄主宰年賀状交換会「榛の会」会員となったことから芸術へと進化を遂げることとなりました。祐生は交流した多能趣味人、芸術家からもたらされた作品も整理収納しており、これらも今日では貴重な資料となっています。

祐生の志を現在に蘇らせる意味もこめて、そのコレクションの一部を、大林様の次回作で、小道具や歴史考証の資料としてご活用いただけないかと、提案させていただきます。

この件につきましては、「祐生出会いの館」中尾慶治郎副館長の同意を得ております。

大変差し出がましいご提案で恐縮でございますが、一度、板祐生コレクションをご覧いただき、次回映画作品でご活用いただける流れが生まれれば幸いに存じます。

大林様の信念と次回作の構想に共感し、金100万円を進呈させていただきたく存じます。

また地元で「大林宣彦監督の次回作を応援する会」(仮称)を結成し、賛同する方々からの募金も行いたく考えております。

3月21日春分の日、松江市でイベントを開催いたします。

つきましては、イベント内で進呈式を行い、大林様のお言葉を紹介させていただければ、より多くの方々と共有できるのではないかと思います、よろしければメッセージを手紙、ファックスないしはメールで頂戴できないでしょうか。

またあわせまして、寄附金のお送り先もお示しいただければ幸いです。

末筆となりましたが、次回作の成功を、心より念じております。

敬具

平成30年3月18日

一般財団法人 人間自然科学研究所 理事長
小松電機産業株式会社 代表取締役
小松 昭夫





世界を駆動させるのは、
あふれる自然の力！

地球をひと回りして自然エネルギーの活況を見に行こう。
メインストリームはすでに原発でも化石燃料でもない現実を！



太陽、風、地熱、バイオマスetc. よくよく見れば、日本は資源大国！
地域も経済も再生させる作戦を開始しよう——。



福島原発事故であぶり出された原発利権構造。日本政府は執拗に原子力発電の復活を目論んでいる。全ての原発を止めようとする脱原発弁護士・河合弘之は「原発を無くしても、自然エネルギーで地域も経済も再生できる」と信じ、世界の自然エネルギーの実情を知る旅に出た。同道するのは反骨の環境学者・飯田哲也。ドイツ、デンマーク、中国、アメリカetc.。電力輸出が増大するドイツ！米国防総省が進める自然エネルギー計画！原発推進国と思われていた中国の絶対的自然エネルギー隆盛！クリーンで安価なエネルギーで世界はもう動いている。日本も遅れをとってはならない！東京高等裁判所でも上映された大ヒット作「日本と原発」の監督が活写する自然エネルギーの大いなる世界！

日本と再生
光と風のギガワット作戦

製作・監督：河合弘之 企画・監修：飯田哲也 制作協力：木村結 音楽：新垣隆 エンディングテーマ：坂本龍一
脚本・編集・監督補：坪身風太郎 撮影：中島喜一 宣伝協力：太秦 制作・配給：Kプロジェクト

2017年 | 日本 | ドキュメンタリー | カラー | ステレオ | ビスタ | DCP | ©Kプロジェクト

nihontogenpatsu.com



一般財団法人

人間自然科学研究所

<http://www.hns.gr.jp/>

〒690-0046 島根県松江市乃木福富町 735-188
TEL: 050-3161-2490 FAX: 050-3161-3846

無断転載禁止

No reproduction or
republication without written
permission.

ver.20180606